

2023年10月8日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解Ⅱ 18 「昇天という近さ」

エレミヤ23：23～24、ルカ24：50～53

問46 あなたは「天にのぼり」をどのように理解しますか。

答 キリストが弟子たちの目の前で地上から天に上げられ、生きている者と死んだ者とを裁くために再び来られる時まで、わたしたちのためにそこにいてくださるということです。

問47 それでは、キリストは、約束なさったとおり、世の終わりまでわたしたちと共におられる、というわけではないのですか。

答 キリストは、まことの人間でありまことの神であります。この方は、その人間としての御性質においては、今は地上におられません、その神性、威厳、恩恵、霊においては、片時もわたしたちから離れておられないのです。

問48 しかし、人間性が神性のある所どこにでもある、というわけではないのならば、キリストの二つの性質は互いに分離しているではありませんか。

答 決してそうではありません。なぜなら、神性は捉えることができず、どこにでも臨在するのですから、確かにそれが取った人間性の外にもあれば同時に人間性の内にもあって、絶えず人間性と人格的に結合しているのです。

難しく感じられた方も多いと思いますが、ここには当時の教会の論争が背景にあります。特に聖餐に関して、ルター派と改革派を二分する論争がありました。ルター派はイエスさまの人間性は神性と同じようにどこにでも存在すると主張しました(遍在説)。だから聖餐のパンと杯の中にもイエスさまの体があると考えました。鉄を熱すると鉄の中に熱がこもるように、パンの中にイエスさまがこもるという表現をいたします。まるでイエスさまの人間性が神性と混ざり合っただけどこにでも存在するような、わたしたちの肉体ある人間性とは異なる存在になっている印象を受けます。

けれども聖書に従えば、イエスさまの人間としてのご性質はわたしたちと全く同じです。わたしたちと同じ体を持ってこの地上にお生まれになられ、その体を持って十字架で死なれ、よみがえられた。そして体を持って天に昇られたのです。ですからイエスさまの体は地上にはありません。イエスさまは昇天された時、その人間である性質を地上に残されませんでした。でもそれでいいのです。イエスさまは今、人間性において共におられるのではないからです。

以前「千の風になって」という歌が流行りました。亡くなった人が風になって大空を吹き渡っている。朝には鳥になってあなたを目覚めさせ、夜は星になってあなたを見守るという内容です。この詩に慰めを受けたという方も多いでしょう。そういう感覚で亡くなった人が共にいることを感じる、感じたい。そういう気持ちもわかりますが、これは極めて人間的な感覚です。神々が自然に宿るといような日本人の感性に共感を得たのでしょうか。ルターの感覚はどうもそれに近いかもしれません。共にいるというのが人間の五感で感じられるような、実際に味わえる聖餐のパンと杯を通してイエスさまが共におられると感じようとしている。

けれどもそういう仕方でイエスさまはわたしたちと共におられるわけではありません。ここがルター派と改革派の違いです。イエスさまの体は地上にはありません。けれどもイエスさまはまことの神さまとして、その神性のあるところどこにでも臨在されるのです。「その神性、威厳、恩恵、霊においては、片時もわたしたちから離れておられないのです」エレミヤ書でも「天をも地をも、わたしは満たしているではないか」(23：24)とあります。これは人間の五感で

感じるというより信仰において感じることです。ですから改革派の信仰によれば、聖餐のパンと杯の中にはイエスさまはおられないけれども、聖霊が働いてわたしたちを天におられるイエスさまに与らせると言います。

イエスさまが天に昇られたのは、他でもないわたしたちのためです。地上を生きるわたしたちの限定的な存在を天につなぎとめていてくださるためです。イエスさまは、まるで衣服を脱ぎ捨てるように人間性を脱ぎ捨て、わたしたちを残して一人天に昇られたものではありません。わたしたちの体を天、神さまのご支配の中に一緒に持って行ってくださったのです。わたしたちは今地上を生きていますが、そのわたしたちの存在を天につないでくださるために、イエスさまはその肉体を持って天に昇られました。そこに昇天のもたらす益があります。

問49 キリストの昇天は、わたしたちにどのような益をもたらしますか。

答 第一に、この方が天において御父の面前でわたしたちの弁護者となっておられるということ。第二に、わたしたちがその肉体を天において持っている、ということ。それはかしらであるキリストがこの方の一部であるわたしたちを御自身のもとにまで引き上げてくださる一つの確かな保証であるということです。第三に、この方がその保証のしるしとして御自分の霊をわたしたちに送ってくださる、ということ。その御力によってわたしたちは、地上のことではなく、キリストが神の右に座しておられる天上のことを求めるのです。

今、イエスさまの体は天にあって、地上を生きるわたしたちはそれで天とつながっています。それは仲保者としての最終的な役割と理解してよいでしょう。罪ゆえに神さまから離れていたわたしたちですが、イエスさまが天に昇られて、わたしたちの存在を天につなげてくださった。そして神さまの御前に弁護者としてとりなしてくださる。昇天は、神さまが遠く離れて行ったことではなく、むしろ近くなることです。イエスさまによって、神さまの御前にわたしたちの体の一部が届いたのです。だからこそわたしたちは地上のことではなく天上のこと、神さまの御国を思うことができるようになりました。

わたしたちが生きているこの地上では罪の闇が覆い尽そうとしています。罪の支配、死の支配に捕らわれ心が挫けそうになります。けれども洗礼を受けてイエスさまに結ばれているわたしたちは心を高くあげることができます。すでにイエスさまが天に昇られて、わたしたちの体を天につなげてくださっているからです。そしてやがて来るべき終わりの日には、わたしたちをご自身のもとにまで完全に引き上げてくださるでしょう。その喜びがわたしたちの生きる力であり、希望です。ルカ福音書では、イエスさまが天に昇られても弟子たちは嘆き悲しむことはありませんでした。むしろイエスさまを礼拝し、大喜びでエルサレムに帰り、神さまを礼拝しました（24：50～53）。その喜びをわたしたちも生きています。

天の父よ。なかなか希望が持てない地上の歩みです。けれどもこのわたしたちのためにイエスさまは体を持って生まれ、体を持って死んでよみがえられ、体を持って天に昇られました。そのようにしてわたしたちを天につなげてくださる恵みを感謝いたします。どうぞ心を高くあげて、あなたの御国をいつも近くに感じさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。